

東国の積石塚古墳とその被葬者

大 塚 初 重

はじめに

1. 大室古墳群の問題点
2. 東国における積石塚の出現年代

3. 大室古墳群における合掌型石室の問題点
4. ムジナゴーロ単位支群における状況
5. 合掌型石室出現の意義

論文要旨

東国という用語には地域の範囲について、多くの見解があるが、この論文では便宜的に中部・関東地方から東の地方という意味で使用する。

積石塚古墳は山石や河原石を用いて墳丘を築いた古墳の名であるが、石ばかりの墳丘もあれば土石混合の墳丘、さらに一部のみに土を使用する古墳もあって、厳密に定義することは困難である。本稿では日オでもっとも代表的な、多数の積石塚が集中的に分布している長野市松代町の大室古墳群の問題点を論じたいと思う。

大室古墳群は総数約500基の積石塚群であるが、千曲川に沿った東西約2.5kmの山麓から谷沿いに標高700mまでの山の傾斜面に分布している。500基の積石塚は分布から5集団にわかれ、その中で最大の大室谷の200基について群の構造と被葬者集団の性格を考える。1984年から8年間の調査で大室谷の3グループ30基ほどの古墳を調査した。村東と大石・ムジナゴーロという3古墳群である。

大室の積石塚の内部構造は、ほとんどが盜掘によって横穴式石室が入口をあけている。500基の中に井戸式のことなる合掌型石室が25基存在している。合掌型石室は韓国の大公州で4例ほど発見されていて、ノ室のそれは百濟からの渡来人の墓で、西暦6—7世紀の築造といわれてきた。

大室谷の3グループの古墳群では、村東248号墳、大石221号・225号墳、ムジナゴーロ196号墳は、いずれも合掌型石室をもつ積石塚で、発掘の結果、西暦5世紀後半から6世紀初頭の築造と判明した。つまり大室古墳群での積石塚の築造の始まりは、合掌型石室構造からスタートして、順次、一般的墓制である横穴式石室への埋葬と変遷した。

古代信濃の合掌型石室墳の開始は、朝鮮から、とくに百濟からの渡来人集団の移住による公算が大きく、彼等は馬の飼育に長じた技術者集団であったことを論じている。